

現代社会における浄土真宗の倫理

——グローバル的視点——

ケネ ス・タナカ

皆様こんにちは。私は今年の二月にも大谷大学でお話をさせていただきました。その後、立派な体育館も完成され、大谷大学の意気込みというものが感じられます。

私は現在、東京にあります武蔵野女子大学の現代社会学部に所属しておりまして、アメリカから日本へ教鞭の場を移籍して、今年で二年目になります。女子大と申しましても、大学院の授業は共学でして、ここでは私の専門である「浄土教」の講座を持っています。学部で受け持つ主な授業としては、二年生の必修科目で「共生の原理」（副題・仏教縁起論）という授業があり、毎年三百五十人の女子学生に教えています。今の若者達は精神的、倫理的な問題に関しては、興味を示さないという批判がありますけれども、この学生さん達を見ている限り、私は決してそのように思えません。彼女達は、私の話をかなり真剣に聞いてくれて、授業の内容を理解しようとする姿勢が覗われます。特に毎回授業に関する意見を書いてもらっている彼女たちの感想文を読みますと、日本の若者は、決して「捨てた者」ではないとつくづく感じます。そういう意味では、現在の日本には、若者に対しての悲観的なムード感が漂い過ぎているようにも思えますが、本当は若い世代にもっと社会の安定化と活性化を期待できるのではないかと思っています。

さて、今日は、私の最近考えていることを、専門的な研究発表アプローチではなく、一般の方々にも御理解できる

ような方法でお話しさせていただきたいと思っております。そして、これはどちらかと言うと、客観的というより、もっと主観的でそして教学的な要素が濃厚である事を、前もってお断りさせて頂きます。話しの中では、新しい本などの紹介を含めながら、「現代社会における真宗の倫理―グローバル的視点」というテーマでお話したいと思っています。さて、「グローバル」と申しましたが、私の力では全世界的な視野までにはおよびませんので、やはり主にアメリカ的視点からの意見になると思います。私はアメリカ育ちで、二年前までは向こうで暮らしていました、今でも家族はカリフォルニアに住んでいます。従って、日本のことはまだよく分かりませんので、日本のことは皆様にお任せして、今日はアメリカのを中心にお話しします。わたしは、決して「アメリカ」と「グローバル」が同義語とは思ってはいませんが、アメリカに起こることは、往々にして、世界の他の地域にもよく似た現象が起こるように思われます。従いまして、アメリカに就いて語るということは、今日の副題である「グローバル的視点」に通ずる所があるのではないかと思っております。

先ず、今日のお話の目的の一つとしては、真宗の活性化ということがあげられます。昔の範疇で言えば、「王法仏法」（おうほう・ぶつぽう）という考え方がありました。中世の浄土真宗教団でもそうでしたけれども、内面的には仏法に依るが、外面的には王法に従う、というように二つに分裂されていました。私はもちろんこの内面的な面は重要だと思っています。やはり内面的な宗教的体験が柱にならなければなりません。しかしこの「王法仏法」では、宗教的体験は内面だけに留まってしまつて、外面的な行動は、世間の権力者によって決められた指導の方法に従つて行なわれていたわけなのです。しかし、私は現代に生きる宗教者として、個人個人の内面的な宗教体験に基づいた外面的な「倫理」について、もっと真剣に考える必要があると痛感しているのです。またそうすることによって、現代真宗の活性化にもつながるのではないかと期待している所です。

私にとって、英語の方が（黒板に）書き易いので英語で書かさせて頂きます。先ず、宗教とは英語で religion と

言います。その religion とは宗教という現象を指す総括的な言葉であり、その言葉の中に含まれているのが、ethics（倫理）であります。私は、倫理を宗教の一部として見ておりまして、言い換えますと、宗教は倫理からかけ離れたものではなく、倫理を包囲するものであります。しかし、日本では、宗教と倫理を別個で、まして対立したものとして考える傾向があり、その場合、宗教とは倫理を超える次元のより高い別個なものとするのが通常のようなであります。

Religion（宗教）に含まれる他のものとしては、宗教体験（spirituality）、教義（doctrine）、儀式（ritual）、および組織（institution）もあります。最初の spirituality とは、「宗教体験」が日本語として最も妥当な意味だと思います。しかし、日本で一番多い訳は「霊性」です。しかし、それは誤解を招き易く、また、現代アメリカで使われている「宗教体験」という意味とはかなり異なります。Spirituality とは、仏教で説く「覚り」や真宗で言う「信心や回心」を指し、これは宗教にとつて、宗教を宗教たらしめる宗教独特なものです。ところで、他に挙げました教義、儀式、および組織に関しましては、今日のテーマが倫理ですので、またの機会にということで、今日は説明から省かせていただきます。

さて、ここで私が言う「倫理」の定義とは、人々の行為、社会における行為、そしておのずからが正か不正かの基準に従って行う行為ということです。ですから社会性を重んじ、そして行動を重んじるということで、社会と行動がこの定義の中心となります。私は、現代における仏教的倫理として、四つの領域を想定することができると考えます。

第一は、spirituality を目指する修行と行動しての倫理です。それは、五戒や十善業や二百二十七等の戒（precepts）があります。これらは、自力的行為を否定する教えに恭順する真宗者（Shin Buddhists）の宗教的目的としては適用しないかもしれませんが、不殺生や不盗難等を説く戒は一般社会の一員として共生する為に、これは根本的価値を提議

してくれるのではないでしょうか。第二に、慣習、因習 (convention) という日常的な倫理です。近世日本では、どちらかというと、仏教ではなく、儒教の「五常」というような倫理観を持ち込み、人々が毎日の生活の中で学びながらこれに従おうとしたのです。日常社会においては仏教の倫理ではなくて、「王法」の倫理、つまり非仏教的な倫理を導入したわけです。しかし現代には、真宗の教えを基盤とした価値観を、特に人間関係等に関して、構築する必要があります。第三には、告知、同性愛者同志の結婚、安楽死、臓器移植等、昔にはほとんど問題にならなかった現代の難しい課題に対して、どのように自分が判断するかというニーズを満たす倫理です。そして第四は、社会において助けを必要とする人たちの為のボランティアを含む貢献的行為を中心とする倫理があります。このように、「倫理」には四つの領域または分野が含まれていると私は考えるのです。

ところで、これは日本とは明らかに異なる点と思いますが、アメリカでは、人々は宗教が社会に関わるということ求めています。従って、仏教が社会に関わらないということは、仏教が「一人前の宗教」ではない、或いは「本当の宗教」ではない、と捉えられたりするのです。内面だけに留まっていると、それはまだ本質ではないと見られてしまう。このように、アメリカでは、宗教がいかに社会に貢献しているかが重要となるのです。

最近出版された『Bowling Alone』という本を紹介したいと思います。これは今年出版されたもので、ハーバード大学のロバート・パトナム (Robert Putnam) という社会学者の本です。Bowling alone とは比喩的な表現です。Bowling というのは、ご承知のように大勢で行うスポーツですが、それを一人 (alone) でやるということです。パトナム先生の調査によると、アメリカ社会における社会的参加、例えば特に Elks, Lions, American Medical Association や P.T.A. という既成団体の活動が低下しているそうです。これは、友達や家族とするピクニックに関しても同じ事が言え、人々は一九七五年には、一年に平均四・九回もやっていたのに、一九九九年は二・〇回へと減ってしまったそうです。このような社会全体の社会参加低下現象は、一九六五年あたりから始まり、この三十五年間社

会的イベントへの参加率が下がり続け、現在では以前の半分程度になってしまったのだそうです。またそれと同時に宗教への参加率も下がっているそうです。パトナム先生はこのような社会現象を取り上げ、社会が健全であるためには、人々がお互いに関わる事で、築き上げる social capital（社会的資本）が必要だと述べています。そこでパトナム先生は、宗教や宗教団体が活性化して、もつと社会的に活躍しなければならないと述べています。なぜかと言いますと、宗教団体に参加する人たちには、社会参加を重視する人達が平均より多いからだと分析しておられ、従って、パトナム先生は、宗教に携わっている人々に大きな期待を抱いておられるのです。

私も今回日本に参りまして、日本においても同じような現象が起こってきているのではないかと考えております。要するに、昔は「近所社会」がもつと健全で、例えば、夏の夕方には隣人同士が夕飯の後、外に出て立ち話をするという光景も見られましたが、それが現在ではほとんどと言ってよい程、なくなったことは事実です。そのような状態は、社会のつながりに問題があり、社会全体が危険な状態に置かれているということなのです。

この三月に、「社会において宗教がもつと活躍しなければならない」ということをテーマとした学会がニューヨーク州で行われ、私も参加致しました。そこには四十人程の学者や宗教家が集まりました。アメリカでは「政教分離」の伝統が歴然として存在する為、社会の公共の場には特定な宗教が参加することが禁じられ、拒まれているばかりか、社交の場では宗教について語ってはいけないという事が常識となっています。しかし、これ自体にも、問題があるのではないかとことが最近一般社会の間で問われ始められており、この学会もその関心を反映したものでした。

このような流れの中で、クリントン大統領は一九九九年に全国の小学校へ、宗教に関するガイドラインを配布しました。これは、なぜ配られたのかと申しますと、やはり社会における宗教の役割というものが、とても重要視されているからなのですが、今現在いろいろな種類の宗教が存在しすぎる為、そういう多数の宗教をいかに調整し、又、それに対して、お互いどのような考えを持つべきなのか、ということを示すガイドラインが必要だったからなのです。

学校には、イスラム教徒の学生もいますし、キリスト教徒はもちろん、仏教徒の子どももいるということで、先生たちがどのように対応したらいいのかという指針が必要だからなのです。クリントン大統領のガイドラインには、例えば、「多様な宗教の表現への対応」という一章が含まれ、ここには各宗教の祭日とその行事への対応や、学校と宗教団体との関わりをどのように持たたいのか、ということなどが示されてあります。私立学校はもちろん、公立学校でも、学生達が自ら先導して行う宗教的なイベントを認める所が、かなり増えてきてはいっているのですが、やはり、地域によって宗教的意識に大分差があり、宗教に対する複雑で曖昧な点をより明確する為に、大統領が全国の公立小学校にガイドラインを配布したわけです。

もう一つ、これに関連したことです。最近アメリカでは、公立学校でも宗教を授業で教えるようになっていました。これはもちろん特定の宗教を進める為ではなくて、比較宗教という視点からの教育です。カリフォルニア州などでは、十年くらい前から、公立の学校で小学校の五、六年生を対象に、いろいろな宗教について積極的な教育を行ってきています。私もこの教科書作りに加わりました。

さて、このことは何を意味していると思われますか。それは、社会が宗教に深く関わっているということです。このような状況の中で、仏教がアメリカでかなり伸びています。今のところアメリカには、三百万もの仏教徒がいるのではないかと言われています。この三百万とは、仏教徒と名のる人達のみを示す数ですけれども、実際に仏教に強い関心を持った人や仏教に対して何らかの知識を持っている人たちも含めれば、その数は五倍以上になると推定されています。この仏教の伸びは、アメリカ仏教が社会へ重要な役割をにない始めてきているからだと考えられます。

倫理と言いますと、思想というよりも行動が中心となります。考えというよりも行いの方ですね。これは現代社会の特徴の一つとされる「ポスト・モダン」的な見解からも指摘されてきました。つまり、現代社会における実践では、頭で考えるというよりも身体を動かすことが強調される傾向にあると言われています。つまり行動というものが要求

されているのです。それと関連しまして、とくに宗教の分野では personal experience (自己体験) という言葉が良く使われます。聖典、経典を読むのはもちろん重要なことでありますが、それだけではなくて、いかに自分自身がそれを理解して納得するかという自己の体験を重視しようとすることです。

それでアメリカの仏教ですが、アメリカ仏教では倫理面がかなり注目されているのです。例えば Buddhist Peace Fellowship (仏教平和同盟) という宗派を超えた全米の団体があります。これも五年ほど前は三千人くらいの会員数でしたけれども、この夏アメリカに帰った時に聞いたところ、もう七千人近くになっていました。これは大変著しい増加だと私は思います。そのほとんどが、白人・ヨーロッパ系アメリカ人の仏教徒だと聞いております。 Buddhist Peace Fellowship という団体は、名前のように平和運動、例えば銃の制限とか、家庭内暴力とか、環境問題というそういう課題を仏教の立場から積極的に考え、実際に改善していこうとする団体です。また、最近はその組織内に Buddhist Action for Social Engagement (BASE・社会参画の仏教行動) という Peace Corp のようなグループをいくつか構成し、社会的問題の具体的な実践に取り組み始めました。

他には、Zen Hospice という施設が最近注目されています。それは、サンフランシスコ Zen Center に関係を持つ人々が主役になって、仏教的観点から、特に AIDS にかかった患者の終末ケアを行っています。最近のアメリカでは death and dying というように、以前タブーに近かった「死」に対してのかなりの興味が集まっています。そこで死に対してキリスト教と異なった新しい観点を持つ仏教が注目され始めているのです。去年、三大テレビネットワークの一つである ABC は、サンフランシスコ Zen Hospice を取材し、「死」に関するシリーズを全米に放映しました。そこでは、死が罪ではないということや生と死が紙の裏表のようなものであるという、以前キリスト文化ではほとんど言われなかった見解をのべたのです。

私は長い間、アメリカ真宗教団と関わってきましたが、一般の真宗門徒 (Jodo Shinshu Buddhists) は、「あなたに

とって浄土真宗の最も代表する教えとは何ですか。」と尋ねた場合、私の勤では、代表的な『歎異抄』や『教行信証』や『三帰依文』というものではなく、皆様にはご存知な方は少ないと思いますが、多くのアメリカの真宗門徒が「Golden Chain (黄金のチェーン)」と答えると思います。この「Golden Chain」とは、一つのモットーのようなもので、特に若い人が多くお参りする日曜日のお勤め (service) の場で一緒に唱えられます。「Golden Chain」は、一九〇〇年代初期に、ハワイで作成されたもので、英語を母国語とする仏教徒には大変愛用されてきました。それはいくつかのバージョンがありまして、本願寺系の Buddhist Churches of America (アメリカ仏教団体) では下記の「Golden Chain」が主流となって伝わっていました。

Golden Chain

I am a link in the Buddha's golden chain of love that stretches around the world. I must keep my link bright and strong.

I will be kind and gentle to every living being and protect all who are weaker than myself.

I will try to think pure and beautiful thoughts, to say pure and beautiful words, and to do pure and beautiful deeds, knowing on what I do now depends not only my happiness, but also that of others.

May every link in the Buddha's golden chain of love become bright and strong, and may we all attain perfect peace. ([Shin Service Book], p. 15)

その内容を見ると、アメリカ真宗の人たちでも、倫理的性格を強く求めていることがわかります。例えば、“I am a link in the Buddha's chain of love... who are weaker than myself” という最初の四行の中で見られるように、弱者に対して倫理的に親切な慈悲的な行為を持って働き掛けようという精神が窺われます。その次に、“I will try to think pure and beautiful thoughts, to say pure and beautiful words, and to do pure and beautiful deeds...”

五―六行目には、「三業」、つまり身、口、意という行動が分かりやすい表現で強調されています。そして最終の八―九行目には、「May every link in the Buddha's golden chain of love become bright and strong, and may we all attain perfect peace.」となっていて、すべての生き物の連結が強く輝き、そして一緒に Perfect Peace (安楽・悟り) に到達しますようにという願いが込められています。

「Golden Chain」は非常にポジュラーであって、これがあるからこそ真宗の教理の真髓が、一般の人、特に若い人にも理解され、有意義な教えとなつて広まってきたのだ、ということが言えます。そういうことからしても、宗教が ethics の面を強調することにより、その宗教団体とその教えが、若い世代に受け入れられやすくなり、それが、宗教の活性化につながるのでは、と私は確信しているのです。この「Golden Chain」をもう少し詳しくご覧になれば、倫理的な面がかなり旺盛に書かれているということがもつとお分りになると思います。

このように、社会的な要請が強く存在し、また倫理的な面も人々が好んでいるという社会状況の中で、倫理ということ再进行検討するべきなのではないでしょうか？ 今までのアメリカ真宗を見ていると、Constructive Shinshu Ethics (構築的真宗倫理) ということは、積極的にはおこなわれてきませんでした。例えば、これは先ほど話しましたアメリカ仏教団での出来事ですけれども、何年か前に国連から、Human Rights Statement (人権声明) が出されました、この真宗教団内の在家者を中心とするグループが、これを教団として認めるべきではないかという意見を教団に投げかけました。彼らは、human rights (人権) ということは全ての人間の人權を認めることであって、宗教団体として認めるべきだと提案したのです。けれども、ある意味でオーソドックスな考え方が強い教団側は、宗教というものはこのような外面的なethicsに加担すべきではないということで、これを拒否したのです。

もう少し詳しく説明させて頂きますと、その理由の一つにrights (権利) という言葉が含まれていたからでした。教団グループはrightsを仏教で言う「欲」と見なしたからなのです。私から言いますと、human rightsというのを

欲として片付けるのは問題であり、他の見方もできると思うのです。例えば、「一切衆生には仏になる可能性が必然的に存在する」、所謂、「仏性」としても良いのではないかということです。また、真宗的に申しますと、「撰取不捨」という根本的な教えも考えられます。誓願はすべての人、いや一切衆生を救うのです。私はこれを、human rightsと同じ次元で見ても良いのではないかと思うのです。ただ、このような考えはやはり少数派の意見であって、人権声明の認定は結局却下されたのです。却下されたということには、「宗教は内面的で倫理は外面的である」という伝統的な先入観がまだ根強く生き残っている証拠だと私は考えます。結局、その為に、宗教教団が人権声明のような倫理的な意見を表明してはならない、と言うことになってしまったのです。

他にもまた、human rights というような倫理に関することを仏教として認めさせない理由がいくつかあります。

先ず、「王法仏法」という世界観です。これは社会を世俗の体制と価値観に委ね、個人的な心の面のみを宗教の領域と考えるのです。次に挙げられるのは「悪人正機」のような思想です。これは、我々は悪人であるから倫理的な行為をなすのは不可能だという考えを導きます。そしてもう一つは、「自力」です。この考えは、本来の卓越な宗教的体験の意味から切り離され、人間のあらゆる行動を自力行為と見なし、真宗的ではない、と決め付ける時によく使われます。以上のようないくつかの理由から、真宗内では、Human Rights というような倫理に関する事柄を認められないという現象が起こるのだと思われるのです。

これについては、最近デニス・ヒロタ氏 (Dennis Hirota) が編集した『Toward a Contemporary Understanding of Pure Buddhism』という本があります。この本は、アメリカや英語圏においての真宗が、新しい立場に立って研究した成果のたまものだと私は思います。この本はニューヨーク大学の出版社から出たもので、デニス・ヒロタ氏を含めたもう二人の学者立川武蔵氏とジョン・ヨコタ氏 (John Yokota) というの三人の仏教学者がハーバード大学名誉教授のゴードン・カーフマン氏 (Gordon Kaufman) と一流のプロセス神学者であるジョン・コープ・ジュニア氏 (John

Cobb J.) を交えた対話を中心にした本です。その中で特にデニス・ヒロタ氏は今までのいろいろな問題点を取り上げ、なぜ真宗が内面的に留まっていたかということについても詳しい説明を行っています。ヒロタ氏には同じような内容を課題とした『親鸞―宗教言語の革命者』という日本語で書かれた本がありますので、興味がおありでしたら、是非ご覧になって頂きたいと思います。

ただ、そう言いましても、日本の長い歴史の間に、倫理的な面を強調し、実際に素晴らしい生き方をしてきた方々がいらしたということは忘れてはいけません。去年ホノルルで行われた国際真宗学会で、大谷大学の安富信哉先生が高木顕明という大谷派の僧侶のことを取り上げられ、私はとても大きなインスピレーションと示唆を受けました。この高木顕明氏は一八六四年から一九一四年まで生きた方で、要するに社会的問題、売春婦の問題、被差別部落の問題、ロシアとの戦争問題などに対して、仏教という立場から反対という形で行動に移された方でした。その結果、彼は国の敵として死刑という判決に至ったのですけれども、自分は正しいという信念の元で最終的には自殺をはかられました。私はその内容を詳しくは知りませんが、この僧侶の宗教感の偉大さを大いに窺うことができると思います。今まで浄土真宗においては、「妙好人」が注目され、彼らが真宗の理想人物像を描いてきたように思われます。私も、もちろん妙好人的な人物は必要だと考えますが、それと同時に高木先生のように社会的に活躍する人達も真宗の模範人物と見なすべきではないかと思うのです。これこそは、特に若い人達に新たな理想像を提供してくれるのではないかと思うからです。

そこで、私は真宗門徒の一人として、どのように真宗倫理を考え、どのようにもう少し活性化するか、ということについて考えてみたいと思います。もう一冊の本を紹介させていただきます。この本は、『Buddhist Theology』（仏教神学）と題されています。「Theology」とうのは奇妙な題ですよ。『神学』つまり神の学ですから、キリスト教では使いますが、仏教で Theology とするのはおかしいのではないかという批判もありますが、とにかく、いい

に論文を書いている（私の論文もこのなかにあります）十六人の学者たちは、どちらかというところ、仏教学者でありながら同時に信仰者なのです。アメリカには仏教学者が増えていまして、私が受ける印象では、そのうち半分、あるいは四分の三は仏教徒だと思います。そして、そのような学者たちが、仏教を教会的な立場から、自分の伝統を踏まえながら、自由な立場でものごとを考えそれをまとめた本なのです。キリスト教の学者はこのようなことを堂々とやってきたのですが、仏教学者になりますと、それはあまりできなかったというのが事実です。ですから、この本に論文を執筆した学者たちは、自分の立場を持ちながら、より新しい誠実な（new and authentic）表現を試みたのです。もちろん伝統というものは重んじないといけないのですが、この Buddhist Theology というような、英語圏での新しい研究方法の登場により、もっと浄土真宗が倫理的な面を考えていくために、多に元気づけられることになると思います。

以上のような問題意識を持ちながら、私はこの数年「常行大悲」ということを考えてきました。常行大悲というのは親鸞が説かれた「現生十種の益」の一つで、信心を得た人に備わる徳を指します。存覚の解釈に基づく伝統的な考えでは、常行大悲とは、個人が念仏を称えることのみとして理解されています。しかし、徳川時代の香月院深助などの諸学者の解釈を見ますと、自分だけが称えるのではなくて、次の人に称えてもらう努力も含まれているのです。それだけではなくて、自分の妻や子供に説教することも常行大悲であると述べているのです。そして、二十世紀の学者の普賢大圓氏は、宗教の領域を超え、衣食住という現実生活の課題に関して努力し、改善を行うことも常行大悲の現われ（勿論、阿弥陀如来の慈悲を根源とする）ではないかと言われたのです。要するに、ただ精神的な面に留まるのではなくて、物質的な領域においても、どんどんと外に広がっていくこととしての、常行大悲を考え直すべきではないかと私も期待しているのです。

真宗では「悪人正機」と言って、我々はどこまでいっても「凡夫」だという基本的な考え方があります。このよう

な宗教的体験 (spirituality) に基づく真理を、倫理的次元に置き換えてみますと、進歩は一切見られないということになります。しかし、親鸞の書物を見ますと、倫理的に我々は変わることができるのである、ということが示されていると思うのです。例えば『末灯鈔』(一六)に、以前は盗みをするような気持ちを持っていた人が、念仏者となつてそのようなことをやめたいという気持ちがわいてきたと記されています。つまり心を入れ替えて、やめるように努力するようになったということは、我々はもちろん基本的には凡夫ではありますがありますけれども、倫理的な面では、変わることができなのだ、ということが示されているのではないのでしょうか。

しかしこの点に關しましては、伝統教学ではほとんど強調されていないのではないかと思います。このような表現の例は、他にまだいくつもあり、私はこの局面を強調していいものではないかと考えています。従いまして、常行大悲ということも社会の広がりの中でとらえ直して行くべきではないかと考えています。私もアメリカでは、「我々が向上しないのならば、いったい何のために宗教をやっているのですか。」とよく聞かれます。私はその場合、「阿弥陀仏や法徳という覚りの視点からでは我々には本質的な改善はありませんが、現実的な次元又は立場においては、多少の倫理的な改善が実際におこりうると思う」と答えています。もちろん我々が凡夫である以上限界はありますが、少しの倫理的な変化は可能であると思うのです。

西洋における倫理とは、大きく分けて、*deontological ethics* (強制的倫理)、*teleological ethics* (目的に達するための倫理)、そして *virtue ethics* (回心に基づく徳としての倫理) という (最初に挙げました倫理の「四つの領域」と異なる) 三つの種類があるとされています。この枠内でみますと、真宗における倫理とは、第一の強制的倫理や第二の目的に達するための倫理ではなく、第三の回心に基づく徳としての倫理が該当すると私は考えます。この種の倫理は、靈性、宗教体験によって自然に備わる徳 (*virtue*) としての倫理観を指し、ギリシア哲学を代表するプラトン等によって説かれたと言われています。これと異なる第一種の場合は、内面的な変化はなくても、宗教習慣や規制に

従った行動をとる倫理であり、また第二種の倫理は、「自力的」な要素を含むので、両方とも真宗的な倫理だとは言えません。真宗的倫理は、第三種のやはり親鸞の著書で窺われる「常行大悲」等のような、回心から自然に出てくる非強制、非自力的な行動であるべきだと思います。

このような倫理観というのは、言うまでもなく真宗的理解と価値観に基づくかなければなりません。その価値観とは、私見となりますが、大きく分けて三つあると思います。一つ目は一切衆生の苦しみを和らげることに努めるということです。『歎異抄』(五)によれば、親鸞は、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母兄弟なり」と宣言されていて、つまり、これはすべての人類や生き物が無始の生まれ変わりの過程で、自分の父、母または、兄弟であったという、莊嚴な横の広がりや連帯感を示しているのです。

二つ目には謙虚な姿勢を持つということです。特に真宗では、「善惡のふたつ総じてもつて存知せざるなり」とあるように、本当の善惡というものはつきり分らないという、謙虚な立場に立つて物事を考えなければならぬと思うのです。しかし、それに比べまして、ジョン・コーブ・ジュニア氏は、キリスト教の倫理観というものは *promptings of the Spirit* (神靈の励まし) というように神が個人個人へ直接話しかけ、何らかの行動を励ますのだ、と決めつけているのです (Cobb, p. 98)。私は、そこにはかなり強烈な善惡観、「私は正しくてあなたは間違っている」というような、歴然たる善惡の区別がなされているように感じられます。私はこのような考えを聞いた際に、どうして罪ばかり欠点だらけの人間がそのように、神の声を聞き取って、またその励ましをこの複雑な現実世界で、大満足に受け入れ行動がとれるのだろうか、と常に疑問を感じざるを得ません。まあ、西洋的な宗教はその面がとても強いのですが、その点、仏教はある意味で弱いとか、曖昧と評価されるかもしれません。しかしそのほうがより人間的で、本当の姿に順じているのではないかと私は思います。ただし、我々はこのにあぐらを掻いていいけないと思います。我々は、真宗の「謙虚な姿勢」とは一体どういう事であるかを、主張と明確性を求めるアメリカ社会

に対して、積極的に説明し、訴え続けなければならないと思うからです。

そして最後の三つ目として、自分の行動に責任を取ることが言えると思います。具体的に言いますと、アメリカでは多くのラジオ番組に、「これはどうしたらいいのでしょうか」というような相談を持ちかける人生相談番組がたくさんあります。私がよく聞く番組に、ある女性が相談してきました。この方のお父さんは七十五歳で、その女性には五十歳そこそこのでした。このお父さんは彼女が小さい頃に、母親を置いて他の女性と逃げていったのだそうです。家族を捨ててしまったわけですね。しかし彼は今、七十五歳になって、娘である自分の所に電話をかけてきて、これからは、孫もいることだし、関係を持つことができればと、いうことを言ってきたそうなんです。その時、彼女は どうしたらいいのか、どのように対処したらいいのか、という悩みを持ったわけですね。今お話しした三つの真宗的価値観をもって言えば、お父さんを拒否するのではなく、やはりお父さんの苦しみも和らげてあげる。だからお父さんを受け入れる。そしてお父さんは悪で、自分やお母さんが善だと決め付けない。もし、これを、はっきり善悪と区別してしまうと、お父さんは悪人になってしまうからです。仏教的立場、真宗的立場からすると、そのようにはつきりと善悪を区別できないと思うのです。やはりお父さんにも事情があつてのことですから、もう少し広い謙虚な心を持って、自分が善で、お父さんが悪という見方をせず、お父さんとの関係をもう一度取り戻し、孫がいる今の状況を受け入れることだと思います。また、お父さんは、第三の価値観である責任というものを何らかの形で取らなければならぬことは確かです。それは、まず、自己反省から始まり、元の妻や子供への何らかの償いが必要になります。もしかしたら、彼が娘に声をかけたことは、この償いの一歩だったのかもしれないですね。

もちろん、同じ真宗門徒でも、倫理的判断は今申しましたように、ならなければならないということでは決してありません。もし画一性を強いたならば、前に話した強制的倫理ということになりかねません。回心に基づく徳としての真宗的倫理は、各個人に応じて判断を促させることなのです。そうすれば、その判断は、上記の三つの価値観であ

る一切衆生の苦しみを和らげることに、謙虚な姿勢をとること、そして責任をとることからよほど大きくはずれる事にはならないと思うのです。しかし、これも私の偏見かもしれませんね。まあ、肝心なことは、多くの人が老父と娘のように、宗教にもとづく指導を求めています。くどく繰り返すようですが、このような具体的な人生問題に対して、「真宗とは救いが目的であって、そのような日常問題には関係ない」と片付けるのでしたら、そこには大きな問題があります。真宗的な立場で現実的な問題を考えることにより、悩んでいる人へ、何らかのサジェスションを真宗の教えを通して提供すべきなのです。

二週間ぐらい前の「朝日新聞」に、一九九八年に経済学でノーベル賞を受賞したケンブリッジ大学のセン教授の記事がありました。その中でセン教授は、しきりに人間は世界を変える責任があり、倫理が人の行動に影響を与えるのだということを、はつきりおっしゃっていました。経済学者として、自分の学問が何のためにあるかと言えば、社会をかえていくためのものなのであると、やはり倫理というものを強調されているのです。そして、その中で、誰を尊敬されているかという点、彼はインドのタゴールと釈迦牟尼仏陀だとおっしゃっています。釈尊を大変評価しているのです。なぜかと言うと、釈尊は洞察力があり、問題意識をもって世の中に貢献したからだと言うのです。経済学者であるノーベル賞受賞者が、仏教の開祖である釈尊が如何に自分の国、社会で行動をしたかということを、このように高く評価することは、大変興味深いことです。そのような経済学者が仏教倫理の重要性を述べているのにもかわらず、私たち仏教徒がそのような関心を強く持つていないということは、やはり問題ではないかと思うのです。宗教と倫理とを理論的に位置付けたり、学問的に倫理のことを話すのは必要なことではあります。けれども最終的には、我々個人が、自信を持って謙虚な姿勢で、自分の宗教体験（回心）を土台にしながら、世間のことを思う行動をとる、こういうことが大事だと思います。どの団体や教団にしても、それに所属する全ての人が同意するということは、大変難しいことですし、それが社会の倫理観となると、それはなかなか全ての人が、同じように、同意するこ

とはできないことだと思います。でも、それはそれでいいと思います。個人個人で、自分なりの宗教観に基づいて、寛容な姿勢で行動することが重要なのです。そういうことから言えば、例えば大谷派の門徒さん一同が同じ倫理的行動をとるということは、ほとんど不可能なことでありまして、そういうことを待っていても物事は一向に始まりません。それより、まず各人それぞれから始める事だと思います。そして、私もそうなんです、皆さんも毎日がお忙しいですね。だからこそ我々が今持っている仕事や与えられた役目を、めいめいの spirituality に基づいて精一杯やるということが大事だと思います。では、このようなことを提案させていただいた所で、私の今日の発表を終わらせていただきますと思います。長い間、ご静聴ありがとうございました。

参考書

Cobb, John B, Jr. and Christopher Ives. Eds. *The Emptying God: A Buddhist-Jewish-Christian Conversation*. Orbis Books, 1990.

Hirota, Dennis. Ed. *Toward a Contemporary Understanding of Pure Land Buddhism: Creating a Shin Buddhist Theology in a Religiously Plural World*. State University of New York Press, 2000.

ヒロタ・デニス『親鸞——宗教言語の革命者』（法蔵館・一九九八）

Jackson, Roger and John Makransky. *Buddhist Theology: Critical Reflections by Contemporary Buddhist Scholars*. Curzon, 2000.

Punnam, Robert D. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon & Shuster, 2000.

Shin Buddhist Service Book. Buddhist Churches of America. Department of Buddhist Education, 1994.